

5232-1/3 5,228^P

経119 12 白1-66^P
統紀録1121 5218^P 29

第九十二章

元明天皇

慶雲四年

(七〇七) 六月十五日

阿閉皇

女は文武天皇の譲位の詔命をお受けになり、

この日に文武天皇はお崩(隠)れになった。

同日 六月二十四日(庚寅)、藤原宮大極殿の東楼で阿

閉皇女は詔し、万機を摂ることをお告

げになった。(「統紀」) 新日本書典文学大

系、岩波書店、一一九頁注十二参照

尚、二十三日後の七月十七日(壬子) 阿

閉皇女(元明天皇)は、大極殿で即位される

(後述)

*

5231-1/2
2行

大内山陵

続紀

同年慶雲四年（七〇七）七月五日条に、

有事于大内山陵

とある。（既述）

①「有事」を、異変のこととする説がある。

②また、「有事」を「ツカフルコトアリ」と

読んで、元明即位の意志を告げ、物を献じた

ことであろうとする説もある。

どちらが正しいのかは分からない。しかしこの物

語では「有事」は異変を示しているのではあ

らうと解いて述べてきた。

この日、天武上皇が大内山陵内に葬られ、

こうして、天武上皇・持統太上天皇

が合葬されたように思われる。（第八十九章

へ天武天皇退位）の頃において既述）

*

続紀録山 124, 125
5162 4行

5162 同又 こと
5229P

5161P

523-1/2 54
528 改訂
529-1/2

5217
5677 白髪
5259-1/2

5,230^P

5231-1/2 54

こと

参考までに述べると、鎌倉時代中期、文暦

二年（一二三五）三月二十日と二十一日の酉

夜にわたって、大和の大内陵が賊に襲われた。

賊は、石室の入口に穿孔して、内部へ入り

宝物（副葬品）を奪い去った。

白髪が死に別れた。

この噂はたちまち奈良や京都にひろまり、

多数の人々がはるばる御陵へおもむき、石室

内に入って、天皇の御遺骸を拝したという。

鎌倉時代にはすでに天皇陵を管理する体制

がゆるんでいったから、両夜にわたって賊に侵入さ

れたばかりか、物見高い野次馬に殺到される

不祥事をまねいたのである。

なお、天武・持統陵について、鎌倉時代の

盗掘後まもなく、まとまった記録がつくらぬ

た。どのような目的で記録されたのかは分ら

ないが、阿不幾乃山陵記と云う表題をも

つ小冊子で、これによりて、御陵の様子を概

略うかがい知ることが出来る。

という「古墳の究極」

という「古墳の究極」

H11.12.16(木)
H9.6.14(土)
H6.1.20(木) ⑤
⑤217[↑] 武蔵 ⑤159-3/3

56才^の
⑤159-1/2
いばつ遺髪 ⑤146
⑤231-1/2

⑤230[↑] 18
58才^前
⑤216[↑] ⑤161[↑]
5171
⑤160[↑] 蝶

⑤217[↑] 天武前
統紀(録)① 256[↑]
天武の系図 ⑤159-2/3
⑤159-3/3

統紀(録)① 256[↑]
⑤159-2/3
⑤159-3/3
77ル

⑤229[↑]
29

4

森浩一、中公新書、ハコ一八頁参照)

大内山陵について、
・陵墓要覧は、奈良

県高市郡明日香村大字野口とする、
・周圀約一

九〇、高さ約七、
・文暦二年盗掘さ

れたときの記録、
・阿不幾え山陵記、
・によると

石室は大理石で造られ、
・天武天皇の棺は乾漆

持統天皇の骨壺は銀製で、
・善美を極めていた

と川う、
・続日本紀(一)新日本古典文学大

系、山坂書店、二五六頁、
・補注一、五一参照)

なお、持統天皇(五十八歳崩)
・の御遺骸は

飛鳥の岡で火葬された、
・(続日本紀)

文武天皇の大室三年十二月十七日条参照)

とすれば、大内山陵内に残されていたとい

う、御白髪は、
・断定できないにしても

天武天皇の遺髪なのであろう、
・と思われ。

通常、天武天皇は、
・五十六歳で崩御された

考えられていたが、
・実は、髪が白くなる

ほどの年齢まで御存命だったのではなからうか

・この物語では、
・わ一卷末の保寿表

へ天武上皇は、文武天皇の大室三年(七〇

三)に七十三歳で薨去された、

と考えてみたい。(第八十九頁「天武天皇退位」の
項において既述、
・巻末の保寿表参照)

コ230 ケー20 20x20
⑤159-3/19新回

大田氏の頃 558[↑]
⑤231-1/2 浮記

⑤230[↑] 18

5,231¹-2/2
背景のヨコレ HV

- ・ カラー
- ・ 左頁の上半分に大きく掲載下さい。

CG制作 / 成瀬京司



トビ
→

1行にする

リアルCG
再現!

14QG

第533図

**天武・持統天皇
合葬陵の石室**

天武・持統天皇合葬陵の石室様式図。石室は、「瑞牆」（御影石か）の切り石で造られていた。参考資料 / 奈良文化財研究所創立50周年記念「飛鳥・藤原京展」

天武・持統
合葬陵の全景

奈良県高市郡明日香村大字野口の阿蘇山麓に立地し、高さ約1235m、周囲は全長約190m、盗掘に遭い、その記録された「阿不機乃山陵記」によってその内容を知ることができる。



カットし、上へ移動。
↑ ⑤5159¹-3/3
← 写真

下へ移動

おおきのさんようき

下へ移動

13QG

『歴史人』(1) 高橋伸幸「KKベストセラーズ」平成26年12月12日発行 19頁参照

大理石のころあ 5231¹-1/2
559

⑤5159¹-3/3 天武・持統合葬陵 写真

たいや 1336^p
大赦

録①-128^p 129

321
続紀録①-129^p
4277①

5,232^p-1/3

②

431^p
続紀録①-123^p
録①-123^p 128^p 129^p
4277①

続紀録①-119^p

5228^p 藤原宮大極殿東階

禁書

5229^p

阿あ

同年慶雲四年（七〇七）七月十七日
閑皇女（元明天皇）は、大極殿で即位され

た。

この即位の日の詔に、

「天下に大赦したまふ。……ただ一軍
器を挾蔵（所持）して、百日首さぬは、復罪

ふ」と初の如くせよ」

とある。

また翌年和銅元年（七〇八）正月十一日の

詔に

「天下に大赦す。……ただ一禁書を

挾蔵して、百日首さぬは、復罪ふ」と初の如

くせよ」

とある。

文字のある武器や、禁じられた書を密かに所

持していた者は、大赦の対象外とされたので

だろう。

125 OM
百日の期限を過ぎても供出しなかった者

● つまり、
へ 記紀完成に至るまでの苦勞を無にするよ
うな口銘のある武器や口禁書を百日間
を設定して供出するように呼びかけたが、
「……かし、この命令を拒み、密かに隠し
続ける人達が居た。そうした者は、この時の大
赦の対象から除外する」
という、朝廷の強い姿勢が示さ小ているよう
に思われる。

① なお、

「軍器や禁書を挾蔵（所持）して、百日首
さぬは、復罪ふ」と初の如くせよ」
とあり、この折の大赦からはずすというのだ
から、~~現実~~に、

「軍器や禁書を所持しつづけていた」
という理由により、
罪有りとされ、~~た~~者
が居たのであろう。

② また

「軍器や禁書を密かに所持していた」
という理由によつて罪人にしたというのだから、

のだから

5.232^P-3/3

(ひと)

の**家宅**捜索が行なわれたのであろうや意味
づいてるように起訴される。
●ともあれ、
へ銘のある**軍器**や、**禁書**を、一つ残らぬ供
出させようと、時の朝廷がやっきになって
いた。
様子を伺い知ることが出来る。

*

(ひと)

緯①-130^P

平城遷都の詔

和銅元年（七〇八）二月十五日 元明天

皇は詔し、昔、殷王五たび遷して、中興の号

を受けき。周后三たび定めて、太平の称を致

しき。安んじて以てその久安の宅を遷せり。

まさ。今、平城の地、四禽図に叶ひ、三山鎮を

作し、電笠並に従ふ。都邑を建つべし。云

緯①-131^P EC-72^P 5106^P

緯①-143^P 5,233^P 天つき 政部 4277^P

と仰せられた。（続紀）

九月二十日条に、平城に幸して、その地形を觀たまふ

とある。（続紀）

元明天皇は、自ら平城の地へ出むいて、地形がすっかり変貌した様子を巡察されたので

あろう。

同年十月二日条に、

宮内卿正四位下大上王を遣りて、

伊勢太神宮に奉らむ。以て平城宮を營む状

緯①-145^P 5257^P 同文 4277^P

同文 5258-1/2 平城宮と伊勢神宮との接続
つなかりがあったこと... 5234 5091 続紀録(1) 161 145

とある。(続紀)

恐らく、伊勢神宮と平城宮との間に、歴史的な深いつながりがあったからなのであろう

同年、十二月五日条に、

平城宮の地を鎮め祭る

とある。(続紀)

いよいよ、地鎮祭が行なわれたのだった。

この時から以降、一年三ヶ月後の

和銅三年(七一〇)三月十日の平城遷

都へ向けて、宮城内に多くの建物が建て増し

されていったように想像される。

第一次大極殿院(前庭を含む地域)の南

に隣接して、第一次朝堂院が設けられた

とではあったろうか。

第一次朝堂院内の大部分は石敷きの広

場とされ、東西二一六間に南北二八八間の南

北に長い長方形の区画内に、四棟の礎石建て

建物が配置された。(第528回参照)

もつとも、平城遷都の翌年、和銅四年(七

一)九月四日の元明天皇の勅に

宮垣いまだ成らずし

511P-1/2 511P-1/2 511P-1/2

511P-1/2 1行

⑤237-1/2
「とはいえ」

とつか
実質工事1607P

5,235P

朝堂⑤5084P中央
5061

⑤5086P

藤原宮以降の大極殿は全7礎石建物

⑤5110P 19年南内舎

⑤5111-1/2
15行

とある。・第一次朝堂院の宮垣や、南面中央門（南門）は、つくられていなかった。というところなのだろう。（第八十八章第一次朝堂院の項において既述）あるいは、平城宮を首都とするに当たって、この第一次朝堂院内の礎石建物の建物こそ、必要とされたのかも知れない。また、揺立柱建物だとすぐに根腐れするという天武五年の教訓を生かして、四棟は礎石建物とされたのであろう。

④ 尚、

① 四棟の礎石建物が、新造されたのか、
② それとも、藤原宮等の朝堂十二棟のうちの四棟が、平城宮へ移されたのか、
詳しくは分らない。一方、藤原宮の遺跡は水害が何かに遭って遺構面が削り取られており、（礎石の痕跡）さえ残っていない場合が多いという。（長安から平城へ）
だが、江上波夫、平月社、一〇〇頁参照）
藤原宮の全域を深く削り取り取りほどこす大きな河川は、このあたり

日本放送出版協会、四四頁参照）内遺物
 後年、藤原宮域の撤底した証拠隠滅が企図さ小
 て遺構面が深く削り取られ、この時柱
 (礎石)の跡など、多くのものが失われ、まっ
 たのかも知れない。
 ともあれ現時点では、藤原宮の建物か、平城
 宮に転用されたのかどうか、定かでない。
 先述のように、藤原宮の場合には、地鎮祭から
 二年半後に遷都された。
 ところがなんと、平城宮の場合、地鎮祭
 からわずか一年三ヶ月後に遷都されたのだっ
 た。あまりにも急な遷都だったような感も
 ある。
 ーかきなう、天武天皇によって造られ

5,237^P-1/2

5416.5237^P ⑤5200^P ①

5083^P-1/2
平城宮の図 ①

た 内裏 第一次大極殿院 などかす
存在 して いた のか 第一 次 朝堂院
建て 増し する だけ で よ かつ た の であ ろ う
● そ こ で 、 地 鎮 祭 か ら 一 年 三 個 月 後 に 遷 都 す
る こ と が 出 来 た よ う に 推 察 さ れ る

*

*

H29(2017)9.29~10.3
H30(2018)11.23(金)~11.24(4回)
H31(2019)4.25(木)~4.26(金)(3回)
令和元(2019)11.3(回)~11.5(4回)

③ 1362^P/₅ 5,237^P/₂ 5236^P/₂
⑤ 5236^P/₂ 平城遷都 和銅3年(710)3月10日

1/4
1/4

*

藤原京について
「続日本紀」などに、京城を拡大した記述があり、考古学上からも大規模な都城だったことが実証された。
という。(第十八章「藤原京」の項において
既述)

ようである。

なお、藤原宮から平城宮への遷都(710)の翌年に、藤原宮は焼亡していった。
扶桑略記、和銅四年(711)一条に、大官(等)寺并藤原宮焼亡とあり、藤原宮は平城遷都の翌年に焼亡したと伝えられている。
藤原京は長らく存続しつづけた